

齋宮にびっくり

この発見には驚きました！ 方格地割

齋宮が最も栄えた平安時代の初め頃には、道路（幅 12m）と側溝で区切られた、「碁盤の目」状の整然とした土地区画が存在していました。方格地割と呼ばれるこの地割は、一辺 120m（約 400 尺）という規格で施工され、またそれを基にした区画が東西に 7 区画、南北に 4 区画存在することがわかりました。『延喜齋宮式』をはじめとする文献には、齋宮寮の周りには大垣と溝が巡らされていて、松や柳が植えられた道路があったとされています。また、齋宮の中には、齋王のいた内院、齋宮の長官のいた中院、そして主神司や膳部司をはじめとする 13 の司が執務を行っていた 外院の存在が知られています。発掘調査では、区画の中に方向を揃えた建物が何棟も建っていて、しかも正殿・脇殿といった官衙的な建物の配置を持った部分も確認されています。方格地割の 20 余数のブロックに分けられた空間は、都を移したような、さながら官庁街とでもいうような風景だったと考えられます。

発見されないことが齋宮の特徴です！

齋宮の建物は、そのほとんどが掘立柱建物というものです。柱を立てるために掘る穴は、一辺が 1m 以上もあるような立派なものも多く、都の建物にひけをとらない規模をもっています。しかし、当時の都の建物と比べると大きく異なる点が 2 つあります。

瓦がないのです。齋宮跡の発掘調査をはじめて以来、瓦の出土はまだ百数十点。しかも破片ばかりですから、とても屋根を葺いていた量ではありません。なぜ屋根は瓦葺きではなかったのでしょうか。「屋根を瓦で葺く」、これは仏教とともに我が国に伝えられた外来の文化にほかなりません。日本の神に仕える齋王がいた齋宮では、仏教はタブーでした。それは言葉遣いにも現れ、たとえば僧侶を「髪長（かみなが）」と言ったり、お経を「染紙（そめがみ）」というように、仏教的な言葉を言い換えて使っていたこと（忌詞）からもうかがえます。

では、仏教の象徴ともいうべき「寺院」のことは何と呼ばれていたのでしょうか。何と「瓦葺き」なのです。齋宮から瓦が出土しないのも頷けます。

平安時代末期の史料では、齋宮の内院・中院は「桧皮葺き」、外院は「茅葺き」としています。

礎石がないのです。これまでに約 4,000 棟という建物が見つっていますが、そのほとんどが掘立柱建物で、礎石は一つも見つかっていません。なぜ、柱の腐りやすい掘立柱建物だったのでしょうか。これも伊勢神宮の正殿をはじめとする建物が掘立柱建物だからでしょうか。また恒久的な建物である必要がなかったからなのでしょうか。謎は尽きません。



古代伊勢道（画面奥が「さいくう平安の杜」）



史跡公園 「さいくう平安の杜」内にある平安時代の復元建物

〔 齋 宮 略 年 表 〕

時代	西暦	天皇	齋宮・齋王の動き	世の中の動き
伝承時代 飛鳥時代		崇神 垂仁	豊鍬入姫に天照大神をまつらせる 倭姫、伊勢の五十鈴川上に天照大神をまつる	
	673	天武 文武	大来皇女が齋王に選ばれる (673) 齋宮寮の位置づけ明確化	壬申の乱 (672) 大宝律令完成 (701) 平城京に都を移す (710) 『古事記』『日本書紀』完成 (712・720)
奈良時代	710	元正 聖武	齋宮寮で初めて公印が使われる (718) 齋宮の役人を 121 人任命する (727)	東大寺大仏開眼 (752)
		光仁 桓武	この頃、齋宮に方格地割が整備される (8世紀後半期)	
平安時代	800	淳和 仁明	齋宮が多気郡から度会郡の離宮院に移る (824) 火事により建物 100 棟ほど焼けて、齋宮が多気郡に戻る (839)	平安京に都を移す (794) この頃賀茂の齋王 (齋院) を置く
		清和 // 光孝	恬子内親王が齋王となる (859) 9 世紀後半頃、在原業平が齋宮を訪れる? (『伊勢物語』) 齋王繁子、群行の途中、鈴鹿頓宮で火事にあう (886)	藤原氏の摂関政治はじまる
		醍醐	柔子内親王が齋王に決定 (897)、以後 34 年間齋王をつとめる この頃齋宮、竹の都と呼ばれる (『大和物語』)	遣唐使廃止 (894)
	900	朱雀 村上 円融	齋王徽子、近長谷寺 (多気町) に白玉丸を施入 (945) 前齋王徽子、村上天皇の女御となり齋宮女御と呼ばれる (949) 齋王隆子、齋宮にて死去 (974) 齋王規子、野宮で庚申の日に歌合を行う (976) 齋宮女御徽子、天皇の反対を押し切って娘の齋王規子とともに再び伊勢に向かう (977)	このころ『伊勢物語』成立 『延喜式』完成 (927) 平将門の乱と藤原純友の乱が起こる (935～941)
	1000	三条 後朱雀 // 白河 堀河	三条天皇、齋王禰遣儀式でしきたりに反して最愛の娘齋王当子を振り返らせる (1014) (『大鏡』) 齋王良子の群行 (1038) (『春記』) 齋王良子、齋宮で貝合を開く (1040) (『類聚歌合』) 齋王媞子、歌合を開く (1083) (『類聚歌合』) 前齋王郁芳門院媞子、田楽踊りに熱中。同年、21 才の若さで亡くなる (1096)	『齋宮女御集』ができる 『源氏物語』作られる 藤原道長の全盛
	1100	二条 高倉	齋王好子、帰京のときにさんざんな目に遭う (1165) (『頭広王記』) 齋王惇子、齋宮で死去 (1172) (『玉葉』) 西行法師が齋宮を訪れ、齋宮の荒れた様子を歌う (『山家集』)	白河上皇の院政始まる (1086) この頃熊野詣が盛んに行われる 平清盛全盛
	1200	鎌倉時代	齋王愷子が齋宮に群行する (1264) (『類聚大補任』) 一齋宮にきた最後の齋王	平氏滅亡 (1185) 源頼朝が征夷大将軍に任命される (1192)
	1300	龜山		賀茂の齋院廃絶 (1212) 承久の乱 (1221) 蒙古襲来 (1274・1281)
	1336	後醍醐	齋王祥子、伊勢に来ず齋王制度が終わる	鎌倉幕府が滅ぶ (1333)

平成 28 年 3 月
平成 29 年 3 月

一部訂補
施設追加

齋宮歴史ガイドシート

齋宮今昔



齋宮歴史博物館

明和町齋宮跡・文化観光課

国史跡 齋宮跡



① 祓川



伊勢に群行してきた齋王は、齋宮に入る前にこの川で禊をしていました。また、江戸時代に伊勢神宮に参拝する旅人も、この川を渡るときに祓をし、身を清めたことから、この名が付いたといわれます。近鉄漕代駅に近い、祓川の東側に「祓戸」という地名が残っています。もしかすると、齋王はこのあたりで伊勢神宮のまつりに臨むための禊を行っていたのかもしれない。

② 大溝



齋宮の北側を東西方向にのびるこの溝は、平安時代末期に造られたと考えられています。深さはところによってまちまちで、水を流すためのものではなかった可能性があります。齋宮の内と外を区別したものなのでしょうか。あるいは、災いの進入を防ぐための結界的なものだったのでしょうか。

③ 八脚門



方格地割に伴うものとして、発掘調査で見つかった唯一の門跡です。とても立派な門で、屋根を支える柱が前後に四本ずつ立てられていることが名前の由来です。この門の発見により、方格地割が東西7列あることがわかりました。

④ 牛葉東地区の大型柵列



(人の立っているところが柵列の柱の跡です)

現在の竹神社北側の発掘調査では、大型の柵列が発見されました。この柵列は、竹神社の境内を取り囲むように延びていて、齋宮の中心部「内院」の区画の一つを囲っていたと考えられています。

⑤ 斎宮で最大の掘立柱建物



(人の立っているところが柱の跡です)

竹神社の東側の区画も齋王の御殿のあった「内院」の一角と考えられています。ここで見つかった奈良時代後期の掘立柱建物は、齋宮跡で最大の建物です。規模は東西17.7m、南北10.8mで、南北にそれぞれ庇を持つ、とても立派な建物です。齋王に仕える女官たちの詰所(台盤所)と推定されています。

⑥ 古代伊勢道



古代の鈴鹿関から伊勢神宮を経て志摩国府に至る道です。史跡内を西北西から東南東に、1.4kmにわたり延びていたこの幹線道路は、左右の側溝間が約9mもある大規模なもので、古代の伊勢と朝廷を結ぶ大動脈でした。齋宮に方格地割が造られると、その内部の道路を使うように設計変更されています。

⑦ 竹神社



現在の竹神社の境内は、明治44年に旧竹神社(博物館南側の森の中にある)が合祀されるまで、「野々宮」と呼ばれていました。また、齋宮城があったという伝承も残されていますが定かではありません。境内の北側や東側の発掘調査で、ここを取り囲む大型の柵列(④参照)が見つかったので、齋宮の中でも特別重要な場所である内院の一画だったと考えられています。

⑧ 土器溜まり



齋宮の中心部である内院と呼ばれる区画では、建物の隅にあたるような場所から土器を大量に棄てた穴や溝がしばしば発見されます。出土するものは、その大半が土師器の杯・皿で、儀式や饗宴に使われたと考えられています。内院地区で出土する土器の90%以上が土師器で、この傾向は平安宮の内裏などとも共通します。

⑨ エンマ川・絵馬殿跡



室町時代に作られた、齋宮に係った能に「絵馬」という演目があります。この能は、大晦日に、齋宮のはずれにある絵馬殿の絵馬を掛け替えるという興味深い慣習にもつづくものです。エンマ川の名は、その絵馬殿の傍を流れている川が絵馬川と呼ばれ、次第にエンマ川に訛ったものと考えられています。また中世の旅人の日記には、「齋宮絵馬辻」や「齋宮のつし(辻)」といった文字が見えます。エンマ川と平行して走る道路(方格地割の東側を南北にのびる道路/写真)と旧伊勢街道との交差点がこの辻にあたります。かつて、齋王は齋宮の東端で堺祭をしてから伊勢神宮に参宮することになっていましたから、辻や絵馬殿は、齋宮が廃絶した後も特殊な空間と考えられていたのかも知れません。

⑩ 斎王の森

「齋王の森」は『伊勢参宮名所図会』(名所案内記)にも見えることから、少なくとも江戸時代後期にはその存在が知られていたようです。伝承では齋王の御殿があった所とされていましたが、周辺の発掘調査が進むにつれ、ここが方格地割北辺に隣接していることがわかってきました。森の中には、昭和4年に建立された「史蹟齋王宮跡」の石碑や杉の木でできた黒木の鳥居があります。現在は神宮司庁の管理地となっています。

⑪ 六地藏石幢



明治時代の神仏分離令は齋宮にも影響を及ぼしました。かつてこの地は伊勢神宮の「神領」であったため、ほとんどの寺院は廃せられ、齋宮の東部(中町)にあった笛川地蔵院も廃寺となりました。当時を偲ぶものとしては、わずかに六地藏が残るのみですが、これは六角形に削られた龕部に六地藏を刻む優品で、室町時代後期の特徴をよく残しています。永正10年(1513)の銘があります。

⑫ 伊勢街道

中世のころ海側を通っていた伊勢街道は、近世(江戸時代)になり松坂に城が築かれると、松坂城の近くを通るようにそのルートが変わりますが、この新旧二つの時代の街道が合流するのがちょうど齋宮の辺りでした。この地は、齋宮が廃絶した後も、交通の要衝として栄えていたようです。今ではめっきり減ってしまいましたが、伊勢地方の特色といわれる「妻入り」(街道側に建物の妻側が面する家の建て方)や連子格子を持った家々は、伊勢参宮で賑わった往時の様子を偲ばせてくれます。また、擬筆紙で作った煙草入れは、現在の竹川(博物館南)辺りで売られ、名物となっていたそうです。

～ 齋宮跡歴史ロマン広場～

● 1/10 史跡全体模型といつきのみや歴史体験館

近鉄齋宮駅の北側に広がる齋宮跡歴史ロマン広場は、史跡全体を10分の1のスケールで表示して、お越しいただいた方々が、その広大な規模と当時の姿を実感していただける施設として平成14年に開園しました。また、過去30余年におよぶ発掘調査成果をもとに、齋王が住んだ御殿をはじめとする中心区画の建物も、10分の1のサイズで配置しています。齋宮の大きさと立ち並ぶ建物の姿を、ガリバーの気分でお楽しみください。

いつきのみや歴史体験館は、齋宮が最も栄えた平安時代の生活が体験できる施設です。貴族の邸宅(寝殿造)を模した伝統的工法による木造建築は、建物そのものが古代建築の体験空間となっています。体験館では、貝覆いや盛双六・蹴鞠などの古代の遊びや香りを体験できるほか、十五夜観月会など平安時代の文化を追体験できるイベントも催されています。

● 柳並木

歴史ロマン広場の外周道路は、ちょうど方格地割の北西のコーナーにあたります。従来より農道として利用されてきたこの道は、発掘調査によって古代より使用されてきた道と同じ場所で使われてきたことがわかりました。文献によると齋宮の周りには溝が掘られ、柳や松が植えられていたそうです。千年以上昔から人々が行き交った道、当時の風景を再現したこの道は、あなたを往時の齋宮に誘います。